



激動の時代を生きた香南の志士たち(龍馬歴史館提供)

維新伝心

土佐勤王党の幹部として活躍した大石弥太郎。亀山社中、海援隊で龍馬と行動を共にした新宮馬之介。

時代は幕末動乱期。郷土を、土佐を、日本を思う若者たちの熱く固い志は広がり、ここ香南の地からも数々の勤王の志士を誕生させました。

いざ **いざ**

幕末の香南へ

勤王運動の先駆者

大石弥太郎

(1829~1916)



野市町横井の郷士の長男として生まれ、名は元敬、後に圓と改めます。勤王運動の先駆者として活躍し、「土佐勤王党」結成の道を開きました。また、その盟約文を起草した事で知られています。

混迷の時代の志

文久元年(1861)に洋学修行の藩命を受けた弥太郎は、江戸の勝海舟の塾で、遊学中の長州藩士桂小五郎ら諸藩の志士と交流し、国事や時勢について議論することが多くなっていきました。このころ、弥太郎は幕府の衰退を感じとり、勤王の志を固めたようです。

剣の修行より 国の大事ぜよ

弥太郎は、武市半平太が土佐から剣術修行に江戸入りしてくると、薩長をはじめ諸藩の志士たちと引き合わせ、お互いに国事に尽力するこ

舞台は 香南

NHKの大河ドラマ「龍馬伝」とタイアップし「土佐・龍馬であい博」が1月16日、県内4会場(高知市・安芸市・梶原町・土佐清水市)で開幕しました。岩崎弥太郎、武市半平太、中岡慎太郎…。坂本龍馬と同じ時代を生きた人たちの深い人物が注目されていますが、私たちのまちにも龍馬たちと共に志の時代を生きた人物がいたことをご存じでしょうか。さて、ドラマに登場するかどうか…残念ながら分かりませんが、今回の特集では、幕末に活躍した香南の志士たちが残した足跡を紹介します。

いざ幕末の香南へ行くぜよ!

とを話し合いました。後にこれが、土佐の志士と諸藩の志士との交渉のさきがけとなったといわれています。

土佐勤王党結成への ユーディネーター

弥太郎は、土佐の同志の結束を志し、「土佐勤王党」の結成の盟約文を立案します。そして剣術に優れ土佐に門弟の多い武市半平太に帰国して同志を集めるよう進言し、盟約文が書かれた血判書を土佐に持ち帰った半平太は、弥太郎の助言に従って同志集めの運動を始めています。その後、坂本龍馬や中岡慎太郎をはじめ多くの加盟者が続出し、192人の署名の他名簿にない同調者も増え、「土佐勤王党」は大勢力となり、弥太郎は、副首相格として活躍しました。そして「土佐勤王党」は、土佐藩参政として藩主の信仰の厚い公武合体派の中心人物吉田東洋を暗殺します。

夜明け前

やがて文久3年8月18日の政変で衰退し、半平太ら同志が捕らえられるなど、土佐藩から厳しい弾圧を受けるようになります。捕らえられて当然の弥太郎は藩命という事で難を免れ、同志の開放に奔走しますが、かなわず半平太らは死罪。慎太郎や多くの志士が脱藩しましたが、弥太郎は破格の扱って土佐藩

の要職に就きます。維新後、新政府で旧郷土保守派の古勤王党の中心人物として活躍し、余生は万葉調の和歌を詠むなど風月を友に88歳で没しました。

【用語解説】

- ※勤王…江戸幕府から政権を朝廷に戻すこと(類似は尊王)
- ※郷土…土佐藩の階級制度で、藩公山内家系の上士と、秀吉に平等された長宗我部系の下士に分けられ、さらに下士階級は、郷土、用人、徒歩、組外、足軽に分別される
- ※公武合体派…幕府は朝廷の伝統的権威と結び付き、幕藩体制の再編強化を図ろうとした。



龍馬歴史館入り口横にある大石弥太郎の記念碑

龍馬とのエピソード

■1867年のイカロス号事件後、須崎沖にイギリス軍艦を確認した土佐藩兵は陸上で臨戦態勢をとっていた。それを見た龍馬が「提督旗を掲げていないイギリス船は、戦争の意思がないことを示しているのに、この騒ぎは何事だ」と言うと、弥太郎は「討幕の練習だろう」と答えた。これには龍馬も腹を抱えて笑ったという。